

## 海老名みや

坂本清音

(女子大学学芸学部教授)

はじめに

創設期の同志社女学校に在籍していた女生徒の中には、明治・大正・昭和の三期にまたがって、日本女性の範となるべき活躍をした人が相当数ある。しかし、その中で、海老名みやと並ぶほどの働きを、年齢と共に積み重ね、生涯にわたって大きく成長した女性は少ないのではなからうか。そういう意味で大変恵まれた生涯を送ることになったみやの内面を熊本時代・同志社時代、そして海老名弾正夫人としての三期に分けて辿ってみたい。

## 一、熊本時代

みやは父横井小楠、母つせ子の一人娘として文久二年九月十五日(西暦一八六二年一月六日)熊本近郊の沼山津で生まれた。そこは大変美しい自然に囲まれた静かな村落であり、そこでは「思ふ存分新鮮の空気と日光を浴びて、快活で天真爛漫」(注)な少女として育った。彼女の生涯で最大の、そして恐らくただ一つの特筆すべき不幸は、父横井小楠が横死を遂げた(明治二年一月五日)ことであろうが、それはみやが満六歳のとき

であった。

その日の思い出を「生涯忘れ難い深い印象を遺した最も悲しい記憶」として述懐している記事がある。その日の家の中の異様な空気、翌日になってようやくみやには「父上は中風といふ病気でお没くなりになったからおとなしくしなければ」と祖母から聞かされ、その時は合点が行ったが、それから幾年か経て真相を知って以来「益々其時の物凄い光景が思い出されて」、以後決して消え去ることのない記憶として心に刻印されたと語っている。

## 海老名みや略歴

- 一八六二(文久二)年 熊本市郊外沼山津に横井小楠の長女として生まれる
- 一八六九(明治二)年 父小楠、京都にて暗殺される
- 一八七一(明治四)年 熊本に移り、熊本洋学校長ジェーンズ夫妻の薫陶を受ける
- 一八七七(明治十)年 兄横井時雄と共に同志社へ。十一月同志社教会において新島襄より受洗
- 一八八二(明治十五)年 海老名弾正と今治教会にて結婚
- 一九〇九(明治四十二)年 安井哲子と共に雑誌『新女界』を発行
- 一九二〇(大正九)年 夫弾正の同志社総長就任に伴い京都へ。日本矯風会京都支部長、キリスト教女子青年会京都支部長としても活躍
- 一九三七(昭和十二)年 夫海老名弾正死去。その後もキリスト教連合婦人会会長などを務める
- 一九五二(昭和二十七年) 死去

みやは父小楠とつて五十四歳の時、始めて授った女の子であったこともあり、熊本に帰省する度にみやを寵愛していたようである。父に対するみやの思いも膝に抱かれていたり、背負われて庭を歩いていたり他愛ない、しかし幸せにあふれたものであった。それに対して、母つせ子との関係は、父を亡くしたということもあり一層濃度が濃く、母から教訓として与えられたことはみやの身体の一部になっていると言つてよい位、彼女の人間形成に影響を与えた。『忘れられぬ一言』の中で、みやは父が亡くなった当座から母が繰返し教えた「お父様の志をつがねばなりません」という言葉を挙げ、『志』ということは何の意味合があるか、何云ふ訳柄であるか』は、母も語らず自分からも尋ねることもなかったが、自分にとつては「権威ある教訓」として聞く度に深い印象を受けたこと、そして、この一言が成長後も自分の精神を支配していることに触れている。また、母が身を以つて華美を戒めてくれたことや、大変複雑な家庭であつたにもかかわらず、みやが十五、六歳になるまで家の中のこと

で愚痴めいたことは一つも母から聞いたことがなかったこと、みやが十七歳の頃始めて「私は此家の雑巾」であり、家の中の不浄を拭い清めて生涯を送るのだと聞いて、母の徳の高さに心から尊敬の念を持ったことなどが、母の年齢になつて始めて身に沁みて思ひ出されたという。

さらに、母つせ子が矢嶋直明・鶴子の五女であることも見落としてはならない事実である。ということは、母の姉には、竹崎順子(三女)、徳富久(四女)がおり、妹には矢嶋楯子(六女)がいることである。明治という時代に、これらの女性たちが個人として示した働きの大きさもさることながら、五女であつた母つせ子を含めて、それぞれがよき配偶者に恵まれ、子々孫々まで日本文化の中核となつて活躍した人たち(例えば、徳富蘇峰、蘆花、湯浅八郎、久布白落實など)を産み育てたことを知るとき、この家系を貫いている気骨と素養の深さには圧倒される思いがする。

さて、父の死後、熊本に居を移した後の、みやの少女期の体験はまた実に異色のものであり、何か運命的なものすら感

じさせる。それは熊本洋学校校長であったリロイ・ランシング・ジェーンズ一家との出会いを通して開かれたものである。その頃みやはまだ十歳になるかならぬかであったが、従姉の徳富初子と共にジェーンズ夫人ハリエットの許で英語の勉強を始めていた。『私の最初のクリスマス』というエッセイの中で明治四、五年の頃、ジェーンズ家で初体験したクリスマスについて語っているが、そんなに早い時期に本物の家庭のクリスマスを味わった人の数は日本中で果して何人いたであろうか。ジェーンズ扮するサンタクロース。キャンディーやチョコレートの飾りがつけられ、種々の贈物で枝もたわまんばかりになっていたクリスマス・ツリー。プレゼントに貰った「オリーブ色の天鵞絨で作られた口金のついた可愛い手提」などは彼女の幼時の貴重な異文化体験であり、生涯忘れられぬ宝物であった。最初ジェーンズ家の家族の一員のよ

うな形で始まった英語の勉強であったが、夫人の妊娠、出産等のため、その役は徐々にジェーンズ氏のものとなり、結局は男子ばかりの熊本洋学校の生徒の中に混じっての勉強へと進んで行った。それはジェーンズにとつては極めて普通の成り行きであったのだが、男尊女卑、「男七七歳にして席を同じうせず」の教えの下に青年になった男子生徒にとつては到底容認できない現象であったとしても、当時の男子生徒を責めることは出来ないであろう。その後、奇しくもみやの夫となる海老名弾正は生徒全体を代表してジェーンズに「意見を訴えに行く」ことになる。「すると先生は眼をまん丸にして其青年を見つめ、劈頭第一、『君のお母さんは男か女か』と言はれた。：此一言で其青年は降伏されて了りました」。それからジェーンズは言葉をついで、「君の幼時に乳を飲ませ、汚れた體を奇麗に洗ひ、勞苦を厭はずはぐ々み育てて呉れた：大切な、貴い母たるべき女を尊敬し、保護し、教育するのがどうして悪い」（傍点抜本）かとその青年を循々と説教されたので、「其青年は一言の返す言葉もなかった」のだと、みやがあゝの有名なエピソードを伝えている。海老名弾正の生涯を貫く女性観、女子教育観が心中深く埋め込まれたのはまさにこの時であり、しかも

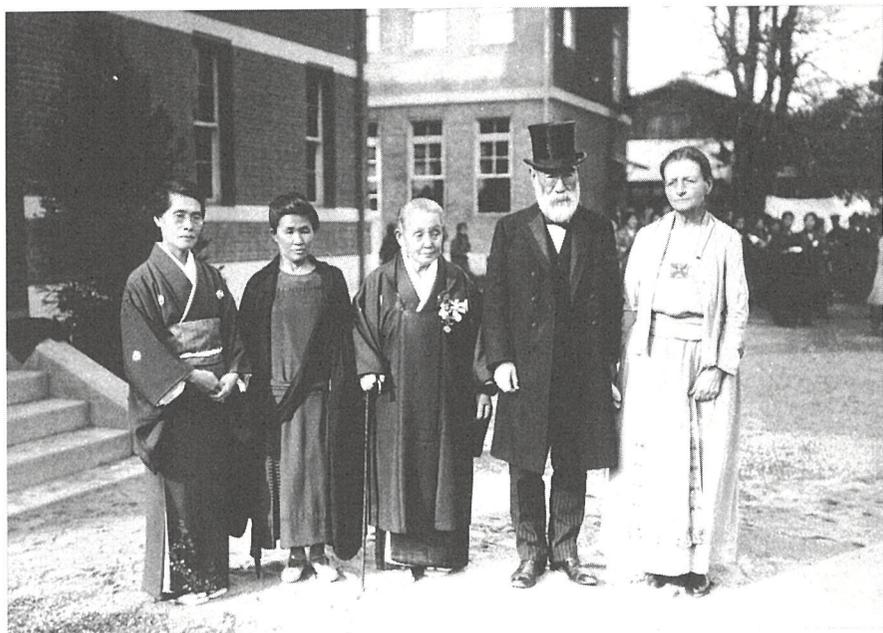
そのとき彼の不平の対象であった女生徒が彼の妻となるとは何と奇しき出会いであったことであろう。

海老名みや・弾正の二人共にとつて、キャプテン・ジェーンズの下で過した熊本時代、キャプテン・ジェーンズを通して教えられたキリスト教およびその人間観、女性観こそが、夫婦のあり方の基本となり、かつ、牧師、教育者、雑誌編集人としての一生を貫く生き方の根元を形成したといつても言い過ぎでないであろう。

あとはこの精神をもとに、人生の途上で遭遇する一つ一つの出来事や状況に対処し、発言し行動して進んで行けばよかつたのではなからうか。それ程弾正二十歳、みや十五歳頃までの熊本時代は意味深かつたと言えよう。

## 二、同志社時代

熊本洋学校の閉校と共に熊本バンドの一行が同志社に来、同志社英学校の基礎を築いたことはよく知られているが、横井（当時伊勢姓）時雄・みや兄妹はすぐ



大正13年12月8日 定明皇后行啓当日記念写真  
左から、海老名みや、松田道、新島八重、海老名弾正、M. F. デントン

に同志社に來ないで、一旦東京に出た。そして、兄は開成学校（現東京大学）で、みやは現地のキリスト教女学校で学んでいたが、開成学校ではキリスト教が教えられないことに不満で、兄時雄は他の二学生と共に退学して、一八七七年同志社に入学した。兄と共に京都に來たみやは英学校とペアの関係として創立された同志社女学校に在籍し、同年一二月二日、第二公会（現同志社教会）で新島襄により受洗した。同志社女学校教師スタークウエザー書簡は彼女のことを次のように伝えている。

「私たちは彼女（みや）の健康のことを心配しています。熊本時代、夜中の十二時まで勉強し、翌朝三時に起き出して勉強を再開していたようです。これに加えて、か細い身体で運動も余りせず（日本人は十三歳の少女にこれがどんなに負担になるか考えないようです）、でも立派な教養ある生徒として私たちの学校に來ました。：彼女の信仰は確かなものです。彼女のお兄さんも優れた働き手で立派な生徒です」。

同志社時代のみやの学校生活を語る際

に必ず語られることは、彼女と従姉の徳富初子、そして山本覚馬の娘峯には英学校で男子学生と共に授業を受けた経験があるということである。社史資料室に保存されている同志社生徒記録をみると、三人其他の男子学生と同じ出席簿の中に(アルファベット順、英語で記名)、例えば、みやは Ise Miya とし、兄 Ise T. の前に列べられており、受講した科目は一八七七年秋学期は Nat. Philosophy と Algebra、一八七八年冬学期は Nat. Philosophy と Chemistry、一八七八年春学期は History と Chinese となっている。そして、それぞれのクラスの出席回数および点数が記入されている。これらのことから、当時同志社英学校で女生徒の扱いは男生徒と全く同じであったことが分る(熊本洋学校の場合、みやと初子は正式の生徒としては登録されていない。その上、二人は「通学丈は免されましたが、黒板に向ふ時の外、教室内に入ることは出来ず、いつも縁側にベンチを置いて、夏には日光に照らされ、冬には寒風に吹かれながら、他の男学生と一所に授業」を受けたとのことである)。

しかし、この三人の女生徒がこのような形で学んだ期間は、一八七七年秋学期から七九年春学期までであったようで、一八七九年六月宮川経輝と加藤勇次郎が英学校余科を卒業し女学校に着任してからは、理科系の科目も女学校で教えることが出来るようになり、その後この制度の適用を受けた女生徒の記録は私の知る限り見つからない。海老名弾正が同志社総長として正式に女子受け入れ制度を作ったのは一九二二年のことである。

『創設期の同志社』の海老名みやの追想記事によると「同級生の中には大西(祝)博士、徳富蘇峰氏の如き、未だ其他にも偉い人達が沢山いたこと、「私は此方々に負けては嫌やだと思ひましたから、多少競争心もありましたが随分勉強」したとのことである。生まれながらの能力に加えて、努力家であったことをよく物語っている。

同志社の歴史の中で、創設期から女子学生を受け入れていたとの事実は確かに特記されるに値することではあるが、みや・初子にとつては、これは熊本時代の体験の延長線上にあるものであり、同じ

教室で学ぶことになった男学生たちの多くも熊本で経験済みのことなので、この時点ではあまり問題を感じることもなく女生徒を受け入れることが出来たと考えられる。

とも角、伊勢みやは同志社女学校には約二年間在籍し、兄時雄が英学校卒業後、今治教会へ赴任するのに伴われて同行したのか、その後同志社女学校の記録に生徒としてのみやの記述はない。この二年の間に女学校は柳原前光邸から現在地二条邸跡に移って新校舎を持った時代であるが、みやはその両方の生活を体験したことになる。柳原邸では食事は生徒が交替で作っていたようで、それまで家事は何一つしたことなかったみやが牛肉の黒こげを作ったり、そこでの生活はあまりみやの健康上もよくなかったこともあり、「一時退寮して新島先生の御宅に」厄介になっていた。

### 三、海老名弾正夫人の時代

#### 1、牧師夫人として

熊本洋学校時代の男生徒の中には、み

やに熱中して失敗に終わった者もあったようであるが、海老名弾正とみやとの結婚は、兄時雄のすすめもあって順調に運んだ。婚約時代に取り交した恋文がマイクロフィルムに取められて同志社大学人文研に所蔵されているが、若き日に主を覚えた純真な青年クリスチャンが英文混じりの文で愛を告白し、二人で始める新生活に神の導きを求める文面は、今読んで感動的である。

いよいよ一八八二年一〇月三日、今治教会で神の前に愛を誓った二人の生活は、弾正の任地安中へ、更に上州、東京、熊本へと移って行く。新婚すぐの頃の田舎生活を思い起して、みやは「夏は瀧なす汗を流し冬は腕までひびを切らした数年の実験〔実体験〕は：幾十巻の書物よりも有益であった」と述懐しているが、牧師夫人として夫を助け、たくましく労働する若妻みやの姿を彷彿とさせる一文である。

一八八七年からの三年間、二人共通の故郷である熊本で、弾正が熊本教会・熊本英学校・熊本女学校創設の仕事を精を出していた頃、みやは、一歳になった長

男一雄と共に幼年時代の彼女の心霊ははぐくみ育てた故郷の豊かな自然を心ゆくまで満喫したことであろう。

その後、弾正は日本伝道会社社長を三年、神戸教会牧師を四年勤めたあと、活躍の場を東京へ移し、弓町本郷教会牧師としてこれまで以上に幅広い活動を開始することになる。夫が伝道会社社長の仕事で北海道開拓伝道に着手していた一八九二〜九三年にかけての一年間、みやは同志社女学校舎監として女学校の生活の元締めとなる部分で重要な働きをする。その後、東京に移ってからも、同志社同窓会東京支部会長を長年勤めるなど、母校との関係は途絶えることなく続いたのである。

## 2、『新女界』同人として

弾正が東京進出を決意したのは、これまでの「田舎伝道師」を脱して、日本国民全体の霊的進歩に寄与したいとの切なる願いからであったが、その志を実現すべく先ず第一に手がけた事業が『新人』(一九〇〇〜二六年)の刊行であった。

次いで『新女界』が『新人』の姉妹誌

として一九〇九〜一九年まで発行されるのであるが、みやは主筆の安井哲子を助けて第一巻から最終巻第十一巻第二号に到るまで、ほとんど毎号計二百篇近い文を載せている。『新女界』の性格は近代日本の基督教主義の進歩的婦人雑誌であり、扱われる内容は教育・家庭・婦人問題などに対する啓蒙的役割が主となっている。みやの執筆したものは「結婚論」「子女教育に対する母の務」「家庭さまざま」「現時生活の混乱状態」など、始めからシリーズとして書かれたものもあれば、「避暑記事」「海外出張旅行記」「思出」「社会批評」などの項目で括れるものもある。その全てを貫くみやの視点は、徹底して家庭で実験(実体験)したことを基に意見を述べるといふ態度である。ということとは、海老名弾正・みや夫妻が営む家庭生活、信仰生活がいつも問われるわけであるが、キリストを頭としてびったりと息のあった二人の生活は実に健全で模範的であることが分る。

この書くという行為が直接的には、みやの筆の力を、そして、ものを見る目を養う点にどれ程役立ったかは言うまでも

ない。

本郷教会時代のみやの活動の幅を大きく広げたもう一つのは、夫に同行した数々の海外伝道旅行であった。朝鮮・台湾を皮切りに、アメリカ・ヨーロッパへと広がる旅の間に、見聞したこと、各地での様々な人との交わり、数々の日英両語による講演等は、みやという人物を一まわりも二まわりも大きくさせ、洗練されたものとした。みやは世界に通用する女性となったのである。

次に、みやを待ち受けていたのは、弾正の同志社総長就任に伴って総長夫人としての役割であった。これまでの経歴からして、その役割を遂行するに際し、みやに欠けたものはや何もなかった。

## 結語

海老名弾正という人物を配偶者として持つことにより、みやの人生は格別豊かにされ、当時一般女性にはほとんど開かれていなかった分野への進出が可能とされ、そして、世界という舞台をも体験することが出来た。その意味で、みやは非

常に幸運な女性であった。しかし、これら全てのチャンスを生かして大きく成長することが出来たのは、彼女自身に内在していたタラントの豊富さ、常に前向きに物事を処するみやのたくましさ、「志」の強さであったと言えよう。

また、女性の場合、本人の書き残したものでその思想、生涯を辿ることが出来るケースは極めて希有なことである。海老名みやはそれが出来る女性であることも特筆すべきことである。

(注) 本文中何の説明も加えず、括弧付きで引用しているのはすべて『新女界』からのものである。

## 1998年度公開講座のお知らせ

同志社大学では学生・一般の方を対象に公開講座を開催し、来年度も次のような講座の受講生を募集いたします。受講料はいずれも無料。申し込み方法、講座についての詳細はそれぞれの事務局までお問い合わせください。

### ■同志社大学公開講座

人文系・自然系各6回の講義を、学内外から毎回違う講師を迎えて行います。開催場所は田辺校地。テーマなど、詳細のお問い合わせは、田辺校地教務事務室(☎0774-65-7050)まで。

### ■授業の一部公開

田辺・今出川両校地で以下の授業を公開します。詳細のお問い合わせは、田辺校地教務事務室(上記)または教務課(☎075-251-3204)まで。

〈田辺校地〉「人権と差別」「ヨーロッパの文化」「イギリスの伝統と文化」「情報」「シルクロード」「南山城の古代」「ことばの科学」

〈今出川校地〉「現代文明とアメリカ社会」「日本の近代化と同志社」「人権と差別」「ヨーロッパの文化」「イギリスの伝統と文化」「シルクロード」「マスメディアの現場」「ことばの科学」(52ページへつづく)